

# なぜ Be 動詞でつまづいてしまうのか？

— 初級レベルの学生の誤答を見ながら —

白 井 由美子

Why Is the Verb 'To Be' Difficult for Learners?

— Error Analysis in Beginners Level Students' English Composition —

SHIRAI Yumiko

## Abstract

The verb 'to be' is taught at the beginning of the first grade of junior high schools. It is a basic grammatical item. Yet even university/college students are confused with the verb 'to be' and regular verbs. The author found this situation, especially when teaching at T College several years ago, where many students did not like English. At first, the author taught how to make sentences (SV, SVO) with regular verbs. After that, students learned how to make sentences (SVC) with the verb 'to be'. The rules of the verb 'to be' are limited and once learners understand them, the verb 'to be' should not be so difficult. Even so, it was still hard for them to comprehend the verb 'to be'. Then the author started wondering why they made such mistakes. She collected their mistakes from their answer sheets and analyzed them. As a result, their mistakes have been classified into six types. Some mistakes are influenced by Japanese grammar (interlingual errors), while others are influenced by other English grammar (intra-lingual errors). We can also see some mistakes resulting from lack of comprehension of the roles of this complex verb.

In this paper, the author mainly tries to explain why students made these mistakes. In addition, we will explore some practical ways to teach grammar. Students in this generation had education without cramming (= *Yutori Kyouiku*) at school. In English class, not grammar but communication skills were stressed. Students repeated the phrases they learned in class and used them in communicative activities, but the grammatical items were not fully internalized. Considering this situation, we need to find effective ways to make students more active in English class.

**キーワード** : Be 動詞、誤答分析、指導方法、英語への関心

**Key words** : The verb 'to be', error analysis, teaching methods, interest in English

## 1. はじめに

「毎年学生は Be 動詞と一般動詞を必ず混同してしまうのよね」という同僚の言葉。

非常勤講師として勤務していた T 短大では、1 年次学生の必修英語は入学時に課す共通英語テストにより 4 グループにレベル分けされている。筆者が一番下のクラスを担当していたが、上のクラスを教えている教員がそのようなことを言うのである。初めて T 短大で教えることになった年だったので、「そうなのか」程度であったが、2 年間教えてみて同僚の言葉の意味がよくわかった。

日本語の「です」、「ます」が Be 動詞にあたるとしても、それをわざわざ Be 動詞と日本語では呼ばない。英語には存在するが、日本語に Be 動詞という感覚が存在しないので間違えるのだらうと考えていたが、スペイン語には Be 動詞が存在するにも関わらず、スペイン人は英文を書く際、Be 動詞を必要とする箇所に Be 動詞をつけない文章を作るというデータも挙げられている<sup>1)</sup>。

このような状況を見ると、単に日本語に Be 動詞が存在しないという理由だけでは無いようである。そこで本稿では、学生の日本語からの英作文（学期末試験）に見られた Be 動詞に関する間違いに焦点をあて、なぜそのような間違いをするのか、また、どのように教えたらそのような間違いを防ぐことができるのかを検証したい。

## 2. 必修英語「英語ベーシックス I（前期）・II（後期）」授業進度

「基本的な英文を自分で書ける・言えるようになること」を目標とする T 短大の英語ベーシックス I・II（必修、週 1 回 90 分）では、Be 動詞を使う第 1 文型や第 2 文型からではなく、一般動詞を使った第 3 文型から教える。しかし文型という言葉を使っては混乱を招くので、短大独自のプリント教材を用意し、「『誰が、どうする、何を』の語順に単語を置けばよい」と教える。つまり、一般動詞は「何か動作をする動詞」であることを徹底的に理解させるのである。工業高校等出身で英語を高校の時に履修していない学生も数名いるため、この語順とこの 3 語のそれぞれの働きをしっかりとこの段階で教え、英文が書けるように指導する。それと同時に、学生に「英文を書くことが出来る」という喜びも教員側は味あわせたいと考えている。この基本の形を教えながら、三人称単数の S や複数形、また、冠詞を導入していく。しかし難しい文法用語は一切使わず、例えば三人称単数の S などは、「『誰が』の部分で I でもなく、You でもなく、一人の時や一つの時に、どうするを示す部分に S をつける」と教える。そして第 3 文型の肯定文の次は、疑問文と否定文の作り方を練習する。

第 3 文型の疑問文と否定文も Do か Does だけなので、こちらも徹底して「I と You、複数の場合」と「それ以外の場合 (He, She, It)」に分けて教える。「それ以外の場合」の時は、どうするの部分の S（三人称単数の S）が取れることになるが、ここが一つの山場にもなる。どうするの部分の S が、Does の S に変わったという説明で大体学生達は納得する。しかし、実

際に英文を作るとなると、動詞にSを残したまま Does を使ってしまう学生や、三人称の場合でも Do を平気で使っている学生もいる。否定文を作る時にも同じような現象が見られる。

次に、「誰が、どうする、何を」の語順で単語を置いた文章が作られるようになれば、今度はそこに「場所」と「時」をつけ足していくと長い文章も作ることが出来るようになることを教える。この時に前置詞を導入する。また、場所と時を尋ねる疑問文も一緒に教え、When、Where、What を用いた疑問文の形も学習する。

せっかく第3文型の文章を作ることが出来るようになって、どの前置詞を使えばよいのか分からない学生も多く、ここでもそれぞれの場合に整理して説明する。一般的な場所、フレーズとして決まっている場所の場合、年、月、日、時間を示す時の前置詞など、学生は文章を作りながら学習し、覚えていく。また、WH-Question Form に関しては、基本の疑問文を習得しているので作り方に問題はないのであるが、答えの英文を見てその答えを導く疑問文を作る指示のある練習問題を解く場合（下記参照）、答えの英文が「時」を述べているにも関わらず Where を使った場所を問う疑問文を作る学生もいて、文の作り方のみならず、もっと Where、When の意味習得も必要であるという状態であった。

問題：答えの文章の斜字体の部分我问う文章を作りなさい。

Q. \_\_\_\_\_

A. I play tennis *on Sunday*.

時制については、ここまで現在形のみを扱っているが、ここで過去形も導入し、過去形の肯定文、疑問文、否定文を習い、WH-Question Form を用いて過去のことも答えることが出来るように練習を行う。

文部科学省の6種ある中学校1年生用英語検定教科書のうち5種において、自己紹介が Lesson 1 のトピックになっている。そのため、中学校で英語を勉強し始めた学習者は Be 動詞、特に I am ～. You are ～. から教えられている。(This is ～. He is ～. は Lesson 2 で導入。) しかし、T 短大では、第3文型が自分の「行動」を示す基本の形であると考え、この文型から教えることになっており、以上の事柄を学生達は前期の間、繰り返し学習する。

それでは T 短大では Be 動詞をいつ教えるのか？第3文型（現在・過去時制）導入後、Be 動詞の導入となる。つまり、後期から Be 動詞を学習するのであるが、前期の復習として一般動詞の復習を1ヶ月かけて行ってから Be 動詞に入る。初めに書いた同僚の言葉は、この時に発せられたものである。

### 3. Be 動詞の教え方

一般動詞を使って文を作ることが出来るようになってくると、学生も中学校で習ったことを思い出し、少しずつ英語に対する苦手意識もなくなり始める。実際に、宿題への取り組みもよくなっている。そのような時期に、Be 動詞を導入する。

一般動詞導入時と同じく、Be 動詞を教える時も Be 動詞の使い方として次の3点のみをおさ

える。

- a. Be 動詞の形：現在形一人称、二人称、三人称、複数、  
過去形一人称、二人称、三人称、複数、
- b. Be 動詞を使う時：一般動詞と一緒に使わない
- c. Be 動詞の意味：1) 「A=B」  
B に置くのは、名詞（物の名前）または形容詞（状態を表す語）  
2) 「いる、ある、存在する」  
場所を表す語句（副詞句）を後ろに付ける

これらの事柄をそれぞれ以下のような例文を使用して教え、練習問題を行う。

〈例文〉

- a. I am fine.  
You are a college student now.  
This movie is interesting.  
I was a high school student three years ago.  
You were a good baseball player at high school.  
He was a teacher in 1990.
- b. Sally is a famous basketball player at school. But she likes tennis, too.
- c. 1) Tom is a student.  
2) Tom is in the library.

Step 1 として、短い英文の中から Be 動詞を探し、c. 1) の意味か c. 2) の意味かを見極める練習問題を行う。そして次に日本語を英語に直す練習問題をするのであるが、すぐに書き始めるのではなく、Be 動詞か一般動詞のどちらを使うかをまず一緒に確認し、その後各自に英文を書かせる。教員は Be 動詞の役割と一般動詞の役割を繰り返し述べ、どのような時に Be 動詞を使うのかをここでしっかりマスターさせるようにする。

また、疑問文と否定文も一緒に教えるのだが、Be 動詞を使った文章の時は、その Be 動詞を文の先頭へ動かしたり、そこへ not を付けたりするだけで疑問文や否定文が出来ることを教える。学生は一般動詞の時のように、Do にするか Does にするか考えなくてもよいので、簡単だと思おうのである。しかし現実には、次の項目で挙げるような間違いをしてしまうのである。

#### 4. 学生の英作文に見られる間違い

T 短大の学生は、1 年次前期で英語ベーシックス I を、後期で英語ベーシックス II を履修する。ベーシックス II では、Be 動詞の他、不定詞、助動詞、命令文なども導入される。また、2 年次でも英語を学習したい者は、インターネット英語という選択科目を履修できる。そこで

は受身、比較級、関係代名詞などを勉強する。

この項では、実際に学生が書いた間違いを挙げるが、英語ベーシックスⅠ、Ⅱ、インターネット英語の期末試験での英作文で見られた Be 動詞に関する間違いを種類別に提示する。

① Be 動詞と一般動詞と一緒に使っている。

- 1) 〈英作：彼は店に行った。〉 \*He was went to the shop.
- 2) 〈英作：朝 8 時に起きた。〉 \*I'm got up at 8:00a.m.
- 3) 〈英作：昼食前に手を洗いなさい。〉 \*You are wash hands before lunch.
- 4) 〈英作：たくさん本を読みましょう。〉 \*You are read many books.
- 5) 〈英作：それはあなたの体を傷つける。〉 \*It's damage your body.
- 6) 〈Q&A：What time did this test start?〉 \*It's start at 3:15p.m.
- 7) 〈英作：何が必要ですか?〉 \*What are you need?
- 8) 〈英作：昨日誰に会いましたか?〉 \*Who is you meet yesterday?

② Be 動詞が欠落している。

- 9) 〈You are late every day. 命令文の否定形に。〉 \*Don't late every day.
- 10) 〈You are careful on the street. を命令文に。〉 \*Careful on the street.
- 11) 〈英作：彼は医者に違いない。〉 \*He must a doctor.
- 12) 〈英作：ゆり子は来年プロのアスリートになるでしょう。〉  
\*Yuriko will a professional athlete next year.
- 13) 〈英作：英語は世界で話されている。〉 \*English spoken in the world.
- 14) 〈英作：その小説は吉本ばななによって書かれた。〉  
\*The novel written by Banana Yoshimoto.
- 15) 〈英作：送料は無料です。〉 \*Shipping free.
- 16) 〈英作：My uncle is old + 山田先生と同じぐらい。〉  
\*My uncle as old as Mr. Yamada.
- 17) 〈英作：私が彼に尋ねた質問は難しくなかった。〉  
\*The question which I asked him not difficult.

③ Be 動詞の使い方を間違えている。

- 18) 〈英作：姉は熱があります。〉 \*My sister is a fever.
- 19) 〈英作：何か飲み物が欲しいです。〉 \*I'm something to drink.

④ 存在を示す Be 動詞としてみなしていない。

- 20) 〈Q&A：Where are you now?〉 \*I am classroom now.

⑤ 時制、単数・複数の使い方を間違えている。

21) 〈英作：私のクラスの学生は25歳以下です。〉

\*Students in my class is under 25 years old.

22) 〈英作：英語は世界で話されている。〉 \*English was spoken in the world.

23) 〈英作：その小説は吉本ばななによって書かれた。〉

\*The novel is written by Banana Yoshimoto.

⑥ Be 動詞は使えているのに、他が間違っている。

24) 〈私は幸せでした。〉 \*I was happyed.

## 5. 誤りの解釈

誤りは大きく2つに分類される。

A. Interlingual errors<sup>2)</sup>

B. Intralingual errors<sup>3)</sup>

A の interlingual errors とは母国語の干渉を受けたために出来た誤りである。行動主義を背景とする言語習得理論では、母国語と第二言語との違いが学習者にとって学习上困難であると考えた。そのため、その二言語を対照分析して、困難点を予想して教材を作成した。それを受けて現場ではそのような点に特に注意して教えたにも関わらず、母国語が関わる間違いが見られ続けていた。母国語が第二言語習得時に強く影響していると言える。反対に B の intralingual errors は母国語干渉以外の誤りを指す。認知主義を背景とする言語学者や現場での教師によって、学習者の間違いは母国語の干渉を受けたものだけではないことが指摘されるようになった。そこには第二言語の文法規則を勝手に類推 (analogy) したことによって出来た誤りや、第二言語習得過程ですでに習った文法規則をあてはめてしまう過剰般化 (overgeneralization) という誤りなどが存在する<sup>4)</sup>。また、母国語を習得する過程において、母国語話者にも見られる間違いを学習者がする場合、それは単なる間違いではなく、発達上の間違い (developmental errors) であり、これらは学習者の中間言語 (interlanguage) であるとみなす考えもある<sup>5)</sup>。

このように間違いは大きく2種類に分類されるが、実際に interlingual errors と intralingual errors との比率について、Richards は53%と36%というデータを示しており<sup>6)</sup>、他の研究者の調査でも類似した数字が出ている<sup>7)</sup>。こうした状況を踏まえて、ここでは上記4に挙げた学生の間違いを分析していきたい。

① Be 動詞と一般動詞を一緒に使っている間違い。

まず、Be 動詞と一般動詞を一緒に使ってしまう間違いであるが、佐々木によると、中学生の英作文には Be 動詞と一般動詞の混同に関する間違いが多く見られるという。初級レベルでよく見られる間違いであるということは、これらの学生が基本的には Be 動詞を使うべきなのか一般動詞を使うべきなのか残念ながらまだよく分かっていないということである。

日本語文を英語文にする時には、授業で習った Be 動詞の働きを思い出し、それと同時に、動作を示す言葉が、求められている英文を作るためには必要かどうかということを判断できれば Be 動詞と一般動詞の混在はしないはずである。にもかかわらず、他の種類の間違いに比べると比較的多くの間違いが存在する。その理由として、中学校、高校で習った英語との関連を見てみる必要もある。つまり、①の間違いは英語ベーシックスの期末テストに見られた間違いであり、まだその時点では受動態や進行形は教えてはいない。しかし、彼らは一応中学校で英語の授業を受けている。大学での英語の授業ではまだ受動態や進行形は習っていないでも中学校での授業を思い出し、単純に Be 動詞と一般動詞をそのまま同居させる文を作ってしまったとも考えられる。こうしてみると、これは英語の文法規則が学習者に対して干渉した intralingual errors である。受動態の規則が頭の中で思い出され、このような間違いをしたとみなすことが可能である。

もう少し詳しく考えてみたい。例えば白畑によると、学習者は無秩序に Be 動詞と一般動詞を一緒に使用しているのではない。学習者は特に自動詞（受動態にはしない動詞）を使う時に Be 動詞も一緒に使用してしまうと言われているが、全ての自動詞に対してそれが見られるという訳ではない。学習者は、動作主（agent）を主語に持つ自動詞（非能格動詞）に対してではなく、話題を主語に持つ自動詞（非対格動詞）を使う時に Be 動詞と一緒に使う傾向があると述べている。白畑が挙げているアラビア語を母語とする英語学習者が発した例文を見てみよう。

25) \*The most remarkable experience of my life was happened 15 years ago.

話題

なぜこのような使い方をしてしまうのか。正しい受動態と比較してみよう。

26) (受動態) A home run was hit by a little boy.

話題

動作主

誤りの例文25)と正しい受動態の例文26)を比べてみると、まず両方とも話題が主語である。動詞については、誤りの文では自動詞の非対格動詞であり、受動態の文では他動詞である。この動詞 hit が他動詞であるかどうかは、26)を能動態に直した下の文を見れば、この動詞が目的語を取っているという点から確認できる。

27) (能動態) A little boy hit a home run.

動作主

話題

つまり、受動態というのは動作主ではなく、話題が主語になることも多い。このことが影響して、自動詞の中でも話題を主語に取る非対格動詞の時に、26)の例文のような話題を主語とする受動態の文をイメージして、Be 動詞と一般動詞を一緒に学習者は使ってしまったりもする。よって、白畑は動作主が主語の文についても述べているが、動作主が主語の時には、学習者はあまり Be 動詞と一般動詞を誤って一緒に使うという間違いはしないと報告している。

28)のような間違った文は学習者には観察されないと言うのである。

28) \*The boy was danced in the classroom.

動作主

このように、Be 動詞と一般動詞を一緒に使用するべきかどうかについて、学習者は自分が持っている言語知識（この場合は受動態の文法規則）を利用して自分なりの文法ルールをきちんと作り出しており、学習者の誤答は自分のルールを使って表れた一種の developmental errors であると結論付けている。Be 動詞と一般動詞の混在の間違いにも学習者なりの高いレベルでの理由があるとみなしている。

それでは今回の初級レベルの学生の間違いはどうであろうか。実際に developmental errors として解釈出来るほど自分なりの文法ルールを作り出しているのだろうか。1)と2)の場合は自動詞であり、動作主が主語である。これだけ見ても、白畑の説は当てはまらない。しかも1)については、動詞は went と過去形であり過去分詞にもなっていない。受動態の意識は無く、Be 動詞と一般動詞を理解していないために生じた間違いである。3)と4)は他動詞である。そのため受動態を意識して Be 動詞と一緒に使ったとも考えられるが、こちらも白畑の意見とは違い動作主が主語である。また、動詞の変化も見られない。5)も他動詞であるが、3)、4)同様、damage の語形変化が見られない。6)は Q となる英文に did があるにも関わらず、わざわざ Be 動詞を使っている。答えの文の It も the test を指した上でこのような文を書いたのか、単に時間を示す言葉が後ろに来るので時を示す漠然とした It として使用して出来た文なのかこれだけでは分からない。しかしいずれにせよ start の変化はなく、また Be 動詞の時制も現在のままであり、初歩の段階の間違いと言える。7)と8)も一般動詞の語形変化もなく、単に WH の形によって混乱してしまったと言わざるを得ない間違いである。

このように見てみると、白畑の間違いレベルとは程遠い内容の間違いである。この初級レベルの学習者の頭の中には、Be 動詞と一般動詞を一緒に使用することに関しては、まだ自分なりのきちんとしたルールが構築されていない。初めに書いたように、この間違いに関しては、まだどのように使ってよいのか分からずに出来てしまった誤りであると解釈すべきである。

その他の理由として、中学校一年の最初に Be 動詞から教えるため、学習者は “I’m” と反射的に使ってしまう傾向があると松井は述べている。松井によると、“I’m” というパターンがどうしても頭に強く残り、つい “\*I’m listen to music.” のような文章を作ってしまうこともあるという。最初に習った文型を “I’m, I’m”、“You’re, You’re”、“It’s, It’s” 等と何度も繰り返して練習し、定着させたことが、残念なことに間違いを引き起こす結果となった。学習者が英語学習初期の段階で学び得た事を、このような形でその後も習慣的に使ってしまうのである。2)から6)の間違いは松井の説にも当てはまる。

## ② Be 動詞が欠落した間違い。

次は必要な個所に Be 動詞を入れていない間違いであるが、これは reduction と呼ばれる。形容詞の前に Be 動詞を入れ忘れた間違いが見られる。その例としてまず9)と10)は問題文に



are と書かれてあるのにわざわざ Be 動詞を省いてしまっている。命令文にするだけであるから Be に変更するだけなのであるが、形容詞を動詞と誤ってしまい、主語のみならず are の部分も省いてしまったようである。命令文の形は分かっていると考えられる。11)、12)はどちらも助動詞の後である。11)の場合は、「医者に違いない」という日本語を「医者であるに違いない」と解釈すれば be が出てきたかもしれない。しかし「違いない」の時は must を使うということを知るので精一杯だったようである。12)は「なるだろう」という日本語なので、「なる」という日本語に注目すれば、be または become あたりが出てきたかもしれない。しかし11)と同じように「なる」という部分より「だろう」に注意が払われたために will のみになってしまったと思われる。あるいはどちらのケースも助動詞という名称はわからないにしても一種の動詞を置いたのだから Be 動詞は不必要であると解釈したとも考えられる。13)と14)は受動態にかかわる間違いである。初めに書いたようにこの短大の学生は英語ベーシックス I と II で一般動詞と Be 動詞について学んだ後、2 年次において受動態や関係代名詞等を学習する。これらはその時に見られた間違いであるが、受動態の文法の中でも一般動詞を過去分詞に直すという点に注意が注がれ、Be 動詞を入れ忘れてしまったようである。あるいは、Be 動詞は不要で一般動詞を過去分詞に直しさえすればよいと思っているのかもしれない。この点は、これらの間違いをした学生が他にどのような受動態の文を書いているか見てみる必要がある。しかし、話題を主語とし、他動詞を使用する等、受動態の文法的な要素は捉えていたとしても、このような間違いをするということは、受動態の規則そのものがやはりあいまいなのであろう。15)、16)、17)はどれも形容詞の前に Be 動詞を入れていない例である。15)の場合は free の品詞が分からなかったようだ。動詞と解釈したと考えられる。16)は同等比較級の as ~ as の形に集中したため Be 動詞を入れ忘れたと思われる。17)もせっかく関係代名詞を使えたが、16)同様他の文法項目に注意が払われてしまったために Be 動詞を忘れることになったか、あるいは、「難しくなかった」という日本語を見て、“難しい = difficult”、“なかった = not” と置いて、出来たと思ってしまったのかもしれない。いずれにせよ他の文法項目が出てくるとまだ間違えてしまうということは、それだけ Be 動詞をしっかりと習得していないということである。初めにも書いたが、スペイン語には Be 動詞が存在し、それを省略しては文章が成り立たない。しかしスペイン人の英語では Be 動詞が必要な箇所に Be 動詞が入れられていない例文29)のような文がよく観察される<sup>8)</sup>。

29) \*The picture very dark.

このことを考慮すると、Be 動詞という言葉が存在しない日本語を母語とする日本人（特に初級レベルの学習者）が Be 動詞と関連のある文法項目を学ぶ時には、Be 動詞の使い方についても改めておさえておくことが必要である。

### ③ Be 動詞の使い方を間違えている。

18)の「あります」は、There is/are の「～があります」の構文を思い出した可能性がある。つまり、「あります」なので、There is と置きたいが、主語が「姉は」なので There を使わず

My sister を主語に置き、「ある」の部分に is を書いたと考えられる。intralingual errors の要素を半分含んでいる。しかし、一方、完全に日本語の影響を受けている interlingual error とも捉えることができる。18)には「あります」、19)には「欲しいです」と書いてあり、その語尾の「ます」、「です」に左右されたのではないだろうか。この「ます」、「です」は丁寧さを示す働きであり、動作の意味はない。これらの日本語の文では「ある」(=この場合は「持っている」と解釈)、「欲しい」といった所有や動作を示す言葉が存在している。しかし、日本語の語尾の部分を本来の動詞と捉えてしまい、ここに Be 動詞を持ってきてしまうこととなった。このように見ると、学習者の日本語理解のレベルが問題となってくる。「これはペンです」、「あれは富士山です (富士山でございます)」などという日本語を使って、学習者は Be 動詞を初級の段階で学んできているので、「ます」や「です」を見たら Be 動詞と即座に反応してしまう傾向があるとも考えられる。指導方法について考慮が必要である。

#### ④ 存在を示す Be 動詞としてみなしていない間違い。

④にも、③と同じく日本語の影響が見られる。「私は今、教室にいます」という日本語が正しい日本語表記であるが、「今どこにいるの?」と尋ねられ、「私、今、教室」とか「今、教室です/だよ」という日本語の文を会話で使うことは可能である。この間違いはそのような口語調の日本語をそのまま英語に直したものと思われる。また、Where are you? という英文に影響された可能性もある。Where are you? という英文には前置詞が存在していない。つまり、Where are you? と尋ねられたので、まず、答えの文を I am where. と並べて作ってみる。今回の場合、where と聞かれた場合、その答えは「教室」ということなので、classroom に置き換えて “\*I am classroom.” という文を作ってしまったのかもしれない。

Where are you?  
 → \*I am where.  
 → \*I am classroom.

本来であれば、where は副詞なので、classroom という名詞そのものに置き換えることは出来ない。また、Be 動詞には Be 動詞をはさんで左側の項目と右側の項目をイコールでつなぐ役割があるので、これでは I = classroom ということになってしまう。そこで存在を示すための前置詞が必要となってくる。しかし今回の疑問文には前置詞が見られず、where が副詞であるということも分かっていないので、上に書いたように単語を置き換えてこのような文章を作ってしまった可能性がある。いずれにせよ、イコールの役割が理解できていなかったために起こった間違いである。Be 動詞のこの働きを認識していないと、以下のような間違いをしてしまうことになる。

30) A: What would you like to eat?  
 B: \*I am kitsune udon.

B は注文の時によく日本人がしてしまう英語での返答である。「私はきつねうどん (です/にし

ます)」と言いたい時に、日本語を直訳してこのような答えを言うてしまう日本人が多くいる。しかしこれでは I = *kitsune udon* になってしまう。イコールの役割をする Be 動詞について知っていれば、英語でも I will have *kitsune udon*. と言うことも出来るであろう。

#### ⑤ 時制、単数・複数に関する間違い。

⑤は時制や数の一致のルールでの間違いである。21)は主語が複数形であるのに対して Be 動詞が単数になっており一致しないケース。22)と23)はどちらも日本語を受動態の英文に直すのであるが、結局 Be 動詞の時制を間違えているパターン。文章は書いているのに日本語をしっかりと読まずに英文に直したために起きてしまった。しかしこれも日本語をきちんと読めば防げる間違いだと考えられるが、実際には「Be 動詞 + 過去分詞」の形に注意を払い過ぎてしまい、時制にまで気を付けることが出来なかったのかもしれない。このように考えると、②で見られた Be 動詞が欠落した受動態の誤文を書いていた学生ほどではないが、この文を書いた学生の英語のレベルも、受動態の文を書くレベルにはまだ十分到達していないと言える。または、もっと単純なケースとして、この学生は Be 動詞の現在形と過去形の混乱をおこしていたのかもしれないとも考えられる。

#### ⑥ Be 動詞は使えているのに、他が間違っている。

⑥には一つの例しか挙げていないが、まずこの学生は Be 動詞の後は ed 形が来ると思いこんでいるのかもしれない。その場合、動詞に ed をつけるのであるが、happy を動詞と判断してつけた可能性がある。もちろん品詞など考えずにただ ed を付ける規則を思い出し、とりあえず ed を付けてしまったということも考えられる。いずれにせよ英語言語内での干渉を受けたケースである。また、別の見方をすると、きちんと過去形 was を使うことが出来ており、Be 動詞がイコールの役割をすることも理解している。それなのに happy に ed をつけてしまった。つまり、「幸せでした」の「でした」は was で示すことが出来たのだが、「幸せ」の部分で「幸せだ」と解釈したために日本語の形容動詞のイメージが浮かび、happy をわざわざ動詞化するために ed をつけたのかもしれない。英語には形容動詞はない。英語を母国語とする人には「形容動詞？日本語では形容詞は活用するのか？」とむしろ不思議がられる。日本語の形容詞、形容動詞の単語が出てきた時、英語では両品詞とも形容詞として扱う。また、形容詞は英語ではそのまま辞書の形で使えばよいので、教える時に品詞の違いや形についてまで言及することはまずない。しかし日本語の文法がこのような形で影響することもあるのであれば、英語には形容動詞がないことと、日本語では形容詞も形容動詞も活用するが、英語に直す時は辞書にあるそのままの形で使うことを伝える必要もあるかもしれない。ただし、日本語の文法もはっきりと理解していない学生もいるので、全てのレベルでこのことを言及すると混乱する恐れもある。学習者の日本語力、英語力も見極めた上で行うようにしなければならない。

## 6. 指導法

T 短大では一般動詞を先に教え、それから Be 動詞の働きを丁寧に説明し、習得するまで教

えてきた。しかし学習者は上に挙げたような間違いを生じている。週1回の英語の授業であり、練習量が少ないということも理由にあるかもしれない。とはいえ学生は勉強しようと思えば毎回の授業の宿題に加え、それに連動した練習問題を何度もコンピュータで出来るようにこの学校では設定していた。そういう状況にあるのにこのような間違いが見られてしまったということは、教え方を再考する必要がある。これらの学生達はゆとり教育の影響もあり、中等教育では英語学習時間の減少とともに教科書で習う単語数も扱う英文の量も減ってしまった。例えば江利川によると、中学校用文科省検定教科書の New Horizon (2006年度版) を使用して3年間英語を学習しても、ペーパーバック約19ページの読書量にしかない。1950年代の教科書を使用して学習した場合と比べると、約3分の1量である。そこへ最近の学校英語の流れとして Communicative Approach や Task Based Approach 等の教授法が導入され、主に Communication Tool としての英語を習得する授業を今の学生は受けてきた。これらの教授法が悪いということではないのだが、コミュニケーションを通して文法の内在化まで到達させることも目的としているにもかかわらず、学校現場では授業時間数の不足等からそこまで行き着かずに終わってしまっているのが現状で、そのため、文法を中心に教えていた頃に比べると最近の中・高・大学生の英語力がかなり下がっているという統計もある<sup>9)</sup>。特に「読む」「書く」力については深刻な事態である。今回対象となった学生達の場合、最初から英語の文法にたまずき英語が嫌いになり、そのまま勉強しなくなってしまった学生や、高校では工業コース等、英語を勉強しないコースに在籍していた学生もいるなど、英語に対する背景は様々である。しかし、彼らについて共通に言えることは、中学校の時に英語の文法を習ったけれどもきちんと定着するところまでいかなかったということである。

英語の基礎を定着させるために今回、学生との interaction も加えながら、文法事項を丁寧に一緒に学習してきた。しかし英作文からまだ分かっていない学生もいるということが判明した。授業方法について振り返ってみると、正解の英文を声に出してみんなで読むという練習は毎回行ったが、その音読回数が少なかったことがまず挙げられる。大学生なのであまり声を出さないということを理由に2~3回程度しか各文を読ませなかった。覚えるぐらい何度も読ませることが必要だったかもしれない。理解したとしても Beginners レベルでは実際には例文をいくつか暗記していなければ使う時に応用がきかない。そのような状態では文法事項が内在化したとは言い難く、結局すぐに忘れてしまうことになる。音読することによって耳も英語音声に慣れた耳になり、口からも英語が発せられ易くなるという利点がある。同時に頭にも定着しやすくなる。また、土屋が言うように、音読する時には、文構造についても意識する。現在の英語教育においては、コミュニケーションの道具としての英語を習得することが学習者の目的の一つである。よって、音読やドリルに終わってはいけないが、この段階で基礎を固めなければ実際の場面で英語をコミュニケーションのために使うことはできない。

ここで一つの練習方法を提案したい。英文の音読を各自で行い、次に、ペアで交互に同じ文を読み合う。そして十分音読できたと思うペアは、1人目が日本語を言い、2人目が英語でその文を言うという口頭英作文を行うというものである。ここまで行うとある程度の例文が定着するので、この後教師がさらに少しずつ日本語を変えて、別の文を英文に直す口頭練習を

させ、自分のことも含めて周りの事柄等を学んだ文法を用いて言える段階まで導いてやる。このようにすると、音読やドリルのレベルで終わるのではなく、実際に英語を使えるところまで学習者のレベルを高めていくことができるであろう。他には、間違えた文を何度も書かせるということも一つの方法である。最近では、インターネット等での練習が出来るようになり、スペル間違いなども自動的に直してくれるシステムがあるため、逆に正しいスペルが書けないという学生も見受けられる。基本的なことではあるが、これが今後の土台となっていくため、単純に思えるかもしれないが、写す、書く、ということも初歩の学習者にはある程度取り入れるべき学習法であろう。

## 7. おわりに

会話重視の英語の授業になったとしても、やはり英語と日本語の構造の違いを考えると基礎となる文法力がなければ何も始まらない。しかし、文法と言うと、一般的に学習者は難しいイメージを持つため、それを回避する指導方法を考える必要がある。さらに、学習者との interaction も取り入れながら、間違ってもよいと思わせる雰囲気作りも大切である。実際に N. Ellis は学習者が誤りに明示的に気付くことがより学習効果を上げると指摘している。

いずれにせよ、毎日英語をコミュニケーションに使う環境ではなく、週1回という限られた学習時間と宿題の時間程度しか英語に触れない学習者であるということを考えると、まず文法を理解させることが必要である。しかし、文法の知識だけでは十分ではない。よって、今までの文法の教え方ではなく、また、コミュニケーションに偏ることなく、「文法」と「コミュニケーションが成り立つ表現」の両方をきちんと習得できる方法で指導しなければならない。単に規則の説明にとどまらせてはいけない。Focus on Form 活動等の文法導入方法を参考に、その文法項目がどのような場面でどのように使われるかまで教える。そしてそれを定着させるためのタスクを提供する。そのタスクも単に得た知識の簡単な繰り返しにならないように配慮し、間違いながらも自分の気持ちや考えが伝えられる英語力にまで高めていけることを英語教育に携わる者としてめざしたい。

### 学生解答訂正

- 1) He went to the shop.
- 2) I got up at 8:00 a.m.
- 3) Wash your hands before lunch.
- 4) Read many books.
- 5) It damages your body.
- 6) It started at 3:15 p.m.
- 7) What do you need?
- 8) Who did you meet yesterday?
- 9) Don't be late every day.
- 10) Be careful on the street.

- 11) He must be a doctor.
- 12) Yuriko will be a professional athlete next year.
- 13) English is spoken in the world.
- 14) The novel was written by Banana Yoshimoto.
- 15) Shipping is free.
- 16) My uncle is as old as Mr. Yamada.
- 17) The question which I asked him was not difficult.
- 18) My sister has a fever.
- 19) I want something to drink.
- 20) I am in the classroom now.
- 21) Students in my class are under 25 years old.
- 22) English is spoken in the world.
- 23) The novel was written by Banana Yoshimoto.
- 24) I was happy.

#### 付記

2011年度第1回神戸女学院大学女性学インスティテュート学外講演会に於いて「なぜつまずいてしまうのか ―Be 動詞―」と題して口頭発表したものに加筆したものである。

#### 注

- 1) cf. Odlin (1989)
- 2) cf. Richards (1970, 1971)
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*
- 5) cf. Selinker (1972)
- 6) cf. Richards (1970)
- 7) cf. Grauberg (1971)
- 8) cf. Odlin (1989)
- 9) cf. Erikawa (2011)

#### 参考文献

- Corder, S. Pit (1981). *Error Analysis and Interlanguage*. Oxford: OUP.
- Ellis, N. C. (2007). "The weak interface, consciousness, and form-focused instruction: Mind the doors." In S. Fotos & H. Nassaji (Eds.), *Form-Focused Instruction and Teacher Education: Studies in Honour of Rod Ellis*, 17-34. Oxford: OUP.
- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: OUP.
- 江利川春雄 (2011). シンポジウム「日本の英語教育をどうするか」第1回英語教育総合学会資料. 大阪, 2011-07-31.
- Grauberg, W. (1971). "An Error Analysis in German of First-Year University Students." In Perren, G. E. & Trimm, J. L. M. (Eds.), *Application of Linguistics*, 257-263. Cambridge: CUP.
- 原田園子 (1979). 「英作文にみられる誤答の分析」『神戸女学院大学論集』神戸女学院大学研究所, No.

25(3), 73-92.

松井恵美 (1992). 『英作文における日本人的誤り』 東京：大修館.

Odlin, T. (1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: CUP.

小篠敏明・深沢清治・萬谷隆一 (1983). 『英語の誤答分析』 東京：大修館.

Richards, J. C. (1970). "A Non-Contrastive Approach to Error Analysis." *ELT*, 25, 204-219.

Richards, J. C. (1971). "Error Analysis and Second Language Strategies." *Language Science*, 17, 12-22.

佐々木行雄 (1979). 「自由英作文のエラー分析 (Error Analysis)」『英米文学』大阪府立大学英米文学研究会, No. 26, 58-94.

Selinker, L. (1972). "Interlanguage." *IRAL*, 10, 3, 219-231.

白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010). 『第二言語習得研究—理論から研究法まで—』 東京：研究社.

高島英幸編著 (2011). 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 東京：大修館.

土屋澄男 (2008). 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 東京：研究社.

(原稿受理日 2012年9月25日)